

書 評

宇沢弘文著『「豊かな社会」の貧しさ』

(岩波書店, 1989年)

暉峻淑子著『豊かさとは何か』

(岩波新書, 1989年)

松 村 祥 子

先日テレビを見ていたら、昨年来日したというバングラデシュの出稼ぎ労働者の人が話していた。「20代の時から点々と、ヨーロッパなどの国々で働いてきたが、数年前から仲間達は日本へ流れ出した。今、日本は世界一の金持ちだけれども、働く人がいないからね。われわれを締め出したら倒産する中小工場もたくさんあるにちがいない。もちろんわれわれもここに永住する気なんてないよ」。

GNPの数字を挙げるまでもなく、日本の経済力の卓越した力と、日本の社会の内部で生じている諸矛盾を肌で感じた言葉だと思った。

ここで取り上げる2冊の著作のなかで共通に主張されている点は、わが国における世界に類のない経済発展がもたらした国民生活のなかでの歪みの指摘と、その是正への提言である。日本経済が産業優先の効率主義を極度に推し進めた結果、国民生活のなかに人間らしい潤いや活気が失われてきたことを嘆き、著者達は、それぞれの専門的知識と経験を通してこの事態を分析している。工業開発の陰で犠牲になった数々の生活問題の事例を通して経済的「繁栄」と人間的貧困を示す宇沢氏、戦後経済復興のなかで生活基盤の充実を置きざりにしなかった西ドイツとの比較のなかで、わが国の特異性を明らかにする暉峻氏。今、日本人のすべてが真剣に取り組むべきこの難題への各著者の情熱と力量に心から敬意を表したい。

これらの著作を読みながら、何故、「日本では本当の豊かさが実感できないのだろうか」と考えてみた。二著者が共に問題としている自然破壊、地価問題、子どもの教育にその一端が表れている。

個々人の所得がどんなに上昇しても、失われた自然は戻らず、世界一の貯蓄率でも遠くて狭い住宅しか買えず、睡眠まで削って競走馬の如く塾通いさせた結果が家庭内暴力やモラトリアム人間多発では、むなしいこと極まりない。

豊かで、質の高い生活を確保するためには、個人の努力ではどうしようもない壁がある。各著者が随所で強調しているように、真に豊かな生活は、個人的なものであると同時に社会的なものである。個別所得の上昇と並行して、その社会共通の生活関連の制度や施設が平等に、バランスよく配置されていなければ生活不安は絶対に解消しない。また、生活の快適さは、経済的生産物からもたらされるだけでなく、“自然”そのものと人間の調和のなかから生まれる。乱開発は、地元住民だけでなく、万人を自然からの棄民とする。あるいは、生活の質の決め手が、「いかに自分らしい良い生涯が送れるか」ということであるとすれば、ひとりひとりの生活の主体性の確立が必要である。社会のリーダーや強者だけではなく、各階層、各世代のあらゆる人々が性別を問わず個性的な自立生活を創造するためには、多様な生活体験（＝教育の変革）が必要である。

1990年代に顕在化しつつある高齢化、情報化、国際化などの進展とそこから生じる社会の諸問題の解決のためには新しい社会システムの形成が必要であるが、その中核として、自主的な決定のできる個人とそういう人を育てるコミュニケーションのネットワークが不可欠である。本当に質の高い豊かな生活とは、単に生活の周りにモノやサービスが増えることではなく、その物を人間生活に

として最も意味あるものとして定着させていくことであるともいえるだろう。国の内外から日本社会と日本人の改造への要請が高まっている今日、ここで取り上げる二著者の貴重な提言は、真剣に受けとめなければならない。

(1) 宇沢弘文著『豊かな社会』の貧しさ

経済学者として40年間、戦後日本の経済発展とその影響を国の内外から見続けてきた著者の豊富な体験をふまえたこの現代日本社会論は、理論的体系的書物ではなく、経済学者としてあるいは良心的知識人としての切実な思いの開陳の著である。水俣病認定、むつ小川原の悲劇、西淀川地区の公害裁判、東京の土地価格、消費税問題、そして日本の大学改革、医療制度の欠陥、農業問題、さらには天安門事件の分析をとおして、日本の経済的パフォーマンスと人間的、文化的貧困の乖離が克明に述べられている。

第一章「水俣病は終わっていない」では、高度経済成長という光の陰に存在する日本の公害問題は、その被害の広範さ、悲惨さはもとより、日本の環境行政のあり方の問題として注視されるべきであると指摘されている。つまり、「水俣病事件は、たんに水俣病だけでなく、ひろく日本の社会に内在する政治的、社会的、経済的な歪みを、鮮明なかたちであらわすものとなっている」。例えば、熊本県は県債を発行して、チッソの水俣病患者に対する補償金支払いを金融面から支援するという措置をとった。宇沢氏は、「一企業の犯罪的行為に対して、このような形で県債を発行して、それを直接救済するということは、日本の公害史にも前例のない異常な措置である」と批判している。また、宇沢氏自身調査に携わった補償問題に関するヒアリングでの会社の幹部の言葉が次のように記されている。「現在チッソの従業員の大部分は、水俣病がすでに過去のものとなった時点で入社した人々であって、そのような人々が、過去のことについて責任をとらなければならない、あるいは非難されるということはまったく心外である」。宇沢氏によるとこの発言は、水俣病をはじめとして、日本における数多くの公害問題に共通

した、非人間的、非倫理的な性格を象徴している。しかし、水俣病問題を深刻化し、その全面的解決をおくらせているのは、基本的に行政の責任も大きく、公害健康被害補償法の経緯などに見られる環境行政の後退の状況にも表れている。そして環境破壊、公害によって犠牲となった数多くの人々の存在をわれわれは忘れてはいけないこと、「日本経済の高度成長そのものも、また二回の石油危機以後の空洞的繁栄もいずれも、これらの人々の犠牲の上にはじめて可能となっているということ自体が、このような日本経済の内奥に潜む矛盾を生み出しているのではないだろうか」と述べられている。最近、水俣病認定に対する国の姿勢を問う問題が生じたが、国はノータッチ、話し合いのテーブルにも加わらないという新聞報道を目にした。評者も熊本に生まれ、子どものときからさまざまな関心を抱いてきた「ミナマタ」であるだけに本当に、公害問題に対する企業責任や公的責任への著者の憤りに同感し、食べるものがないという貧困は少なくなっても、もっと悪質で悲惨な生命の奪われ方や健康の傷つき方があることを多くの人に知らせる必要を痛感した。

第二章のむつ小川原の悲劇とは、新全総による国土開発計画により生じたものである。1971年、国、県、民間企業が協力してむつ小川原開発公社が作られ、1972年には閣議了解をうけて日本最大規模の工業基地の開発計画が着手された。この際の用地取得活動は強引で数々の禍根を農民の生活に残した。工業基地完成時には有利な条件で雇用を保証するという約束も、二度の石油危機による計画縮小などでくずれてしまった。さらに、むつ小川原開発計画の実質的崩壊、農漁民の棄民化という深刻な状況に直面して核燃料サイクル三施設の誘致が県の窮余の策として出されているという。著者は、「高度成長期を通じて、さらにその後の調整期にも、いかに多くの工業開発計画が作成され、農民、漁民さらには都市住民の犠牲のもとに強行されてきたか。いちいち挙げるいとまもないが、これらの開発計画、工業化計画の失敗については、自然環境を元通りに回復するだけでなく、そこに住んで、生活していた人々の人間的、経済

的環境をも回復するために必要な、法的、財政的手段を見いだすことが、日本の経済社会の安定的成長のために不可欠であるように思われるのである」とも語っている。

他章においても、異常な土地価格水準によって悪循環化している生活関連施設の不足や所得分配の悪状況そしてその原因の一つとなっている日本の税制（法人の優遇）などについても深い見識が披露されている。殊に、第八章「日本の大学に自由はあるか」で展開される独自の大学批判では、表題ではどんな関係があるのかと思われる“大学の貧困”が実は、日本社会の諸悪の発源地だということがよく分かる。現在日本にある500の大学は大衆化し、かつ自治、自由を喪失してしまっている。大学の自治は、①教授人事の自律性、②大学入試制度の自主性によって測られるが、いずれも文部省の指導下で主体性を減少させている。科学研究の性格が大きく変わり、社会的、経済的条件もまた大きな変革を経験しつつある現代においてプライマシーの大学は、学問研究の最先端の方向と水準を切り開き、同時に社会のあらゆる面、階層において次の世代を担う若者たちに良い方向での人間的人格的特性を形成するところであらねばならない。大学がその本来の機能を十分に果たすことができる条件が存在しているときには、各大学の学生の性向、資質も多様なものとなる。ところが10代の若者のもっている資質、才能、夢をそれぞれの形で伸ばしていく環境は、共通一次試験（センターテスト）によっても損なわれている。この大学の荒廃のなかから育つ学生の多くは、社会的倫理観に乏しく、人間的魅力に欠ける偏差値人間である。特に、中央官庁の高級官僚を志向する学生にこの傾向が強いということは、国の基本的計画作成の方向にも危惧を抱かざるをえないと著者は嘆いている。最終章では天安門の悲劇についての意見が記されている。この事件は、社会主義建設を資本主義の発展形態にならっておこなおうという点で、基本的な誤りを犯しているところから起こっていること。特に日本の高度経済成長を一つの模範として、望ましい経済発展のあり方の典型とみている点に大きな問題があると分析さ

れている。中国事情に精通し中国に多くの友人をもつ著者のこの見解を読みながら、本当に日本の社会のあり方が貿易摩擦などで国際的に非難されるだけでなく、他の国の国運を左右していることに胸が痛んだ。

紹介が長くなったが、評者は、本書を読んで経済学者の社会現象へのスタンスのとり方や切り込み方に新たな刺激を受けただけでなく、1人の個人として、この現状打開の糸口を模索する情熱と良識に大いに共感を覚えた。そのなかで、若干問題点として感じられるのは次の三点である。

第一には、第四章で自動車の害毒について明確にされているが、およそ、どの国でも現代生活は自動車抜きでは考えられない。日本ではどのような形であれば少しでもジェイコブズの原則を生かすことができるのだろうか。第二に土地問題の解決策として法人所有の土地を公有化し社会的に管理する制度が提案されているが、パリなどと違い都心域の広い東京でどの範囲を適用するのか。国鉄跡地が企業の土地獲りのターゲットと化しているような日本でどういう方法だと実現可能性があるのだろうか。第三に、「墓地ですら自ら動かざるをえないような危機的症候群にある」大学をプライマシーの大学と大衆の大学と区別し、プライマシーの大学において重点的に研究、教育水準を上げることで、大学の現状が打破できるのだろうか。政策立案者はエリート大学出身者であっても、経済や社会の実質的な担い手はそれ以外の大学出身者である。この層をどうリードするかが国民生活の具体的な諸場面での質的向上とつながってくるのではなかろうか。

（2） 暉峻淑子著『豊かさとは何か』

1年前に出版されて以来、新書ベストセラーとして広い読者層の支持を得ている本書のなかでは、効率を競う日本の社会の弊害がどのように国民生活に影響を与えているかが記されている。

日本人1人あたりのGNPは1986年以来、アメリカを追い越した。地価、貯蓄高、企業交際費の高さも異常である。日本のこの経済的繁栄はわずか40年間に急激にもたらされた。あまりに急速な

変化が日本人の生活価値観を狂わせ、その結果、カネとモノのあふれる生活のなかに身を置きながら、豊かさがもたらすはずの人生の安堵やゆとりからどんどん遠ざかっている。教育や福祉はおざなりにされ、自然環境は破壊され、子どもたちは主体性を失い、老人は大切にされない。「豊かさに憧れた日本は、豊かさへの道を踏みまちがえたのだ」と著者は断言している。

このような日本に比べて、西ドイツでの生活にはゆとりがあるという。どんなふうに西ドイツ人の生活が日本人の生活と異なっているかが、著者自身の滞独体験も含めた数多くの事例を通して、述べられている（第二章）。落ちついた豊かな緑と規制の下で整った美しい街並みがある。教育や福祉への社会的責任がはっきりしている。例えば、個性を育てる方向で展開される教育体制の下で、西ドイツの学生は自分の意見をきちんともっている。老人への福祉がゆき届いている。特に住宅や土地への社会政策がしっかりしているために暮らしやすい。公共料金が安定している。労働時間が短く自由時間が多い。

暉峻氏は、この見解が決して氏ひとりのものでなく、他の滞独経験者も同様の感想をもっていることも出しながら、西ドイツでの生活基盤の充実の実態を描写している。この観点から日本を見ると、「金持ちで貧乏な国」の問題点が浮き彫りにされる。つまり、わが国における大企業の所有する富と国民生活との断絶は、富を投資にだけ使う効率主義への対抗手段がないことから生じている。効率主義の毒に対しては、抗体としての強い「個」と社会的制度の育成が必要である。環境保護、教育そして社会保障制度の充実が不可欠であることが強調されている。

第三章では、物量的豊かさが、特に強者の論理で推し進められるとき、生産の拡大は、かえって国民生活の貧困を導くこと。「女たちの生活実感」や「高校生たちの疑問と不安」で出ている意見をみると、万人にとって自明の、地球的豊かさから遠のいていく日本人の生活に危機感を抱く人の多いことが分かる。また西ドイツよりも年間約 500 時間長い日本の労働時間にこれまた長い通勤時間

を加えると、当然のことながら自由時間は極度に短縮される。その結果、疲労感を訴える者が多く、睡眠や食事にも影響が出ている。第四章で引用されている全国建設関連労協の調査によると、「残業が月10時間を超えると、育児や子どもとの遊びがなくなる」ことから、「人間らしい生活をするには残業は月10時間が限度」と著者は宣言する。また労働時間短縮なしには男女雇用平等も、「ゆたかな労働」もありえない。家庭生活の崩壊やストレス、過労死の頻発を目のあたりにして、どこから改善の糸口をつかんでいけば良いのか多くの人が悩んでいる今日、第四章の“ゆとりをいけにえにした豊かさ”に同感する人も多いと思われる。

第五章では、総務庁の家計調査などを引用しながら、勤労者世帯のなかで貧富の差が新たにひろがりつつあることや、生活不安の裏返しとしての貯蓄率の高さが皮肉にも土地暴騰の一因ともなっていること、ないに等しい日本の住宅政策のために住宅ローンに振り回される現象が指摘されている。また社会保障を削減してきた日本の政治の方向は、新しい人間の共同体的土台を築かず、人間の活力を奪う。かきたてられる消費ではなく、自主的に決定される欲望が育っていないため、物を買えば買うだけゆとりややすらぎと反対のあせりや不安が増大していく。

結局、“本当の豊かさとは、効率主義から脱却し、いきいきとした人間の活力が戻ってくることなのか”と、本書を読み終えて感じた。第六章で述べられているように、豊かさとは何か、どのように豊かな人生を生き、豊かな社会をつくっていくかは、それぞれの人が考え、行動することによって創られるものである。しかし、社会的に、このような条件が備わったら、それぞれの人が豊かな人生を創り出しやすくなるという共通条件は必要であろう。著者が強調するその3つの条件とは、第一に、共通の生活基盤の充実、第二に、2つの自然を統一して生きる、第三に、労働時間を短縮し、労働のあり方を変えることである。そして今それらを確保していくための草の根の市民活動が胎動し始めていることに著者は期待を寄せる。「経済価値優先主義によって、画一的モノサシで

優劣をきめ、敗者を排除していく社会の流れに抗して、このような草の根の動きが社会の大きな流れとなっていくときに、つまり人間の思想と活動が豊かな共存に向けていきいきと動き出すときに、豊かな社会は実現され、生産力はそれに役立つようになるだろう」という言葉で本書は締めくくられている。

宇沢氏と同年に生まれ、同世代を生きてきた暉峻氏は、生活する者の側から戦後40年間の日本の社会の変化と日本人の生活を見守ってきた。そして、「日本は経済大国であるのに、国民には豊かさ感がない」ことの理由の解明に挑戦したのが本書である。著者が積み重ねてきた数々の独自の生活分析の視角が本書には散りばめられていて興味深い。また西ドイツでの生活レポートも従来いろいろな人が断片的に紹介してきたものと異なり一貫

性総合性があり、かつ正確である。ただ、多少、気になった点は、例えば、戦後の西ドイツ社会、特に経済的発展の底を支えてきた大量の外国人労働者の存在に触れないでもうひとつの繁栄が称賛されていること。また確かに抗体としての個人主義やそれを支える社会的制度の充実が日本とは比べものにならないほど進んでいると思うが、それは決してドイツの普通の若者の生活形成の活力となっていない側面もあること。例えば、わが国でも起こりつつある非婚や出生率の低下、就業拒否などの現象が西ドイツでいち早く極度に表れてきたのは何故なのか。これらの事情は東西ドイツの統一が実現した今、どう変わっていくのだろうか。本書を離れても興味深い点である。

(まつむら・さちこ 群馬大学教授)